金の瞳曰く蛇

瀬利　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金の瞳曰く蛇

【Ｎコード】
Ｎ２８５６Ｉ

【作者名】
瀬利　無音

【あらすじ】
古から金蛇の女神ラブスの伝説を信仰し続けているイース帝国。そのイース帝国の帝都ラディスから遠く離れた山奥に女神ラブスと同じ漆黒の髪と金の瞳を有した少女がいた。
伝説に縛られ、村から出る事も叶わなかった少女がある事をきっかけに外の世界に出ることができるのだが、金蛇の女神ラブスの伝説が色濃く残っているイース帝国はそんな少女を放ってはくれないのであった……

青帽子の使者

小さな村の小さな教会、私の籠はいつもと変わらず静かに佇んでいた。４本のヴァッコルの木に囲まれ壁には長い時間を感じるツルのヘタが地面から壁をつたって伸びている。

外観は古いものと認識させるほどなのに扉だけは立派な造りになっていて整備もされ蛇の模様がきれいに浮き出ていて生きているかのようだ。

いつものようにその蛇の頭を軽く触りながら門を開けて入ると、天井から七色の光が降り注いでいて、信仰者を迎えてくれる。その光を出しているのは金の蛇を肩に巻いて微笑んでいる女神。

この国がまだ小国だった頃から信仰されているイステル教の神ラブスだ。私はこいつの事があまり好きではない。

そんな女神から視線を祭壇に移し歩き出すと、床が軋んで音を奏で少しだけ反響する。二日前に腐って抜け落ちた床の板の上をひょいっと飛び越え祭壇に近づくと、寝坊して遅く来てしまった私に助祭リックの目線がキツく突き刺さった。

毎度の事なので慣れっこだが、今回はこっちにだってちゃんとした言い分はある。

昨日、深夜に私の家を訪れたコフェップ司祭が少しお話がというから聞いてやっていたら最初の村の作物の状況の話からすぐに脱線して何度聞いたか分からない金蛇ラブス様の伝説を語りだしどのように偉大なのかそして寛大なのか聞かされ、気づけば空が少し明るく

なってその神とやらが起きる時間になっていた。

誰が見たって今回誰に非があるかと言えばリックが慕っているコフェップだ。

しかし、それをリックには言わない。なぜなら、そんな完璧な理由すらリックにかかれば神の教えを使って私に非があるように言いくるめることができる。

こんな事になるのなら、もう司祭の話は寝る前に聞かないようにしようと固く心に刻んだ時。

ふと妙なことに気付いた。いつもならすでにリックの怒鳴り声が教会に響いても良いのになぜ何も言ってこないで目線だけなのだ？

少しの遅刻すら『神の与えてくれている時間を何だと思っているのですか！』と教えに基づき叱ってくるのに。

そんな事を考えていたら、驚いた事にいつも祭壇横の扉から出てくるコフェップが私と同じ方向から目の下を黒くさせフラフラと入ってきた。

なるほど。

とすぐに理由がわかった。

リックがその異様な様子に気付き司祭を支えに行ったが、少しばかり遅かった。

司祭は腐って抜けていた穴に右足を見事に捕られ豪快に転んだ。リ

ックは少し呆然とした後すぐさま司祭を起こして膝のホコリを払っている。

私はその間、腹を抱えて大笑いした。

『はぁはぁ…コフェップ……久々に面白かったぞ』

ひとしきり笑い終わって一息ついてから、いつもの憎まれ口をたたく

『マニ様！その言葉使いは何ですか！』

今日初めてのリックの怒声。

『……リック。いいのです。悪いのは私です。ラブス様が与えてくださった人が休まなければいけない貴重な時間を私は得なかった。これはそれに対するラブス様からの罰なのです。』

いつも私に対して眉間にしわを寄せて怒る強面の顔は今日に限っては、年相応の萎れたおじいさんだった。よほど、寝不足が老体に響いているのだろう。

そんな哀れなコフェップを見ながら手を合わせるとリックにキッと鋭く睨まれた。

『ま、司祭なのに寝不足で遅刻なんて最』

低と言う前にリックにゲンコツをされその場にうずくまる

『マニ様が言うセリフでは無いでしょう』

そういうとリックはいつものように奥の祭具室へいった

残されたマニとコフェップ。話さないのもあれだったので一応声をかける事にした

『昨日人ん家であんだけ喋るからそうなるんだよ』

少し間があいてから『そうですね』と返事が返ってきた。さすがに歳も歳なんだから本当に危ないのではと思い

『だ、大丈夫か？』

と言いながら背中をさすってあげる。するとコフェップが喉でクックックと笑い出し先ほどまで萎れていた顔を上げた。

『いやいや、マニ様に心配されては私も天に召す日が近いかもしれませんな』

上げた顔は笑顔、寝不足の事など忘れているようだ。もしかして声をかけてもらう為にすべて演じていたのではと疑うほどに。

大きく背伸びをして背中の骨をコキリコキリとならす。

『さ、マニ様。儀式に向けて清めの儀をいたしましょう』

何がスイッチになったのか分からないが完全に目覚めたコフェップはいつもの強面の顔に戻り、聖典を手にして祭壇の上に立った。

『あぁ、声かけなきゃよかった…』

ぼそっと言うとこちらを向きもせずコフェップはフフッと笑った。やっぱり演技だったらしい…

物心ついてから何も変わらない日常。幼い頃から私は金蛇の巫女として崇められ村の者すべてが私をラブスの生まれ変わりだと信じている。

漆黒の髪に金色の瞳、こんな姿に生まれてしまった自分を私は呪っている。いつからだろうか、毎朝の清めの儀で女神を見るのが苦痛になったのは、最初は他の者と違う自分を選ばれた人間だと思い特別だと思っていた。

大人は私に祈りを求め、子供には洗礼をする。そんな毎日をずっと続けてきた。そんなとき一度だけ他の子供達に混ざり玉遊びをしようとした時大人達は一斉に私を止めた。怪我をしては大変だ。巫女様がこんな事をしてはいけない。

その時からだ、私は特別なんじゃなく仲間はずれなんだと気づいたのは。この歳で村から出た事がないのも私だけ、私の世界はなんて狭いんだろう。私は伝説に縛られる巫女、そして教会は私の籠、村は世界そのもの。

そんな事を思いながらコフェップの清めの儀をうけていると、リックが慌てて正門の方に駆けて行った。

まだ時間でもないのに人が来たらしい。清めの儀の際、聖職者以外

はこの場にいてはいけない。

儀式を中断して村人と話すリックを見ていると村人だと思っていた人は全く見た事のない男で、傭兵のような格好をしていて頭にかぶっている青い帽子にはラブスの印がされている。

その事に気づいた直後、リックが手に持っていた儀式で使う聖杯を落とした。幸い割れてはいないみたいだがリックらしくもない。その聖杯を拾おうとしゃがみ込もうとした体は拾わずにそのままその場にペタンと崩れ落ちた。

なにがあったのだとコフェップと私はすぐにその場に駆けた

『リックどうしたのです！リック！』

教会にコフェップの声が響きわたる。反応しないリックのかわりに青帽子の男が口を開いた

『この村の長ウフェル殿がラグニでお倒れになりそのまま御亡くなりになった』

感情など一切こもっていない冷たい言葉で男は言い終わった後に私の容姿に気づいたらしく少しだけ動揺が見えた。

『ば、ばかな！何かの冗談であろう？まず、そなたは何者なのです！』

コフェップが声を張り上げた。

男は変わらず無表情で、ポケットから銀色のものを出した。これが

何だと、コフェップは訝しげに見つめるとすぐに顔つきが変わった。

『どうしてフロイツのあなたが態々くるのですか？』

話し方が変わったと言う事は司祭よりも上の者なのだろう。銀色のものははっきり見えなかったが蛇の模様のようなものが入っていたので、国直属の機関の人なのだろう。

『それは申す事はできぬ。あとこれを』

さっきとは逆のポケットからペンダントを出した。それを見たとたんコフェップも崩れ落ち司祭と助祭は二人してその場に崩れ落ちてしまった。

『祖父はどんな最後だったのです？苦しがらずに逝きましたか？』

ペンダントを受け取りながら金蛇の巫女は訪ねた。

そう、このペンダントは私の祖父のもの。

この村の長でもあるウフェル＝エズモアは私の祖父であり唯一の血縁者。だが村にいる事はほとんどなく旅に生きる人だった。だが村に帰ってくると旅の話やその地域にまつわる伝説や武勇伝を聞かせてくれた。

『あなたがマニ様ですね』

小さくうなずく。

「あなたの祖父は偉大な方でした。最後は今までの勇士に似合わず

眠るように逝きましたよ」

初めて感情がこもった言葉だった。その言葉にニコリと笑顔を向けるとフロイツの男は『あなたは本当に巫女のようだ』と小さくつぶやき、一礼して馬に乗って去って行った。

その後は崩れ落ちている二人をなんとか教会の中まで連れて行った。

今、巫女の私が気丈に振る回らなければ誰がこの村を導く。巫女の私がやらなければ。

ふと、教会の女神像に金色の瞳を向けた。いつものように微笑んでいるその像は今日だけは哀れんでいるかのようだった。

伝説に私を縛り付け、私を泣かせてもくれない金蛇のラブス。

本当に対した神だ。

そんな事を考えていると太陽は夕焼になっていて空は気持ち悪いくらい赤く染まっていた。そして、その反対側から夜という闇が大地を這うように迫って来ていた。

最愛の祖父が病で亡くなった。私以外、住むものが居なくなった家の窓から外を見ると、窓から溢れ出る光を飲み込もうと闇がポッカリと口を開けていた。回りを見ると見渡す限り広がる暗闇の世界、一時の間に自分の家以外はすべて闇に飲み込まれてしまったんだと思えるほどに。

私の祖父が作ったこの村、では祖父がいない今私はどうするべきなのだろう。ついさっきまで動揺する村人の代わりに金蛇の巫女としてのそして村長の娘としての最初の役割は果たした。

しかし、自分にはこれからも彼らを導ける自身が無い。巫女と呼ばれたって所詮はただの人間。何か特別な力があるわけではない。巫女という概念を捨てれば私はただの娘っ子だ。そして、祖父という唯一の家族も無くし私には本当に何もなくなってしまった。

一人は嫌だ。

そんな事を考えていると、私の我慢していた感情が涙と一緒に流れ出ていた。

そして、私はいつの間にかあの人の名をひたすらに呼んでいた。

何度も、何度も。

声がかれて喉から血の味がしようともやめようとせず、ずっと同じ名を呼び続けた。その言葉しか知らない生まれたての赤ん坊のように。

しかし呼んでも呼んでも、闇がその音すらも飲み込む、残酷すぎる闇に対して思わず笑ってしまいそうになった瞬間。

その残酷な闇から音が返ってきた。

しかしその音は自分の出した声が反響して帰ってきたのではなかっ

た。雷の音に似ている。

と思いながらすぐに馬車が駆けてくる音だと気づいた。

来てくれた。

伏せていた顔を上げて涙を服の袖で拭き取ってドアが開くのを待った。

家の前に止まった馬車から、ザッザッザッザと気持ちのいい音を出しながら近づいてきたその音の主はノックもせずに勢いよくドアを開け、入ってくるなり玄関で迎えようとしていた私に抱きついた。

あんなに泣いたのに強欲にも私の瞳はまだ涙を流そうとしていた。自分で飽きれてしまう。

呼び人の名はリファ・クラスト

東の山を3つ越えたところにあるイスクという町で教会の司教をしている。

この村に毎年布教をしにやってくるのだが空いた時間に友達のいない私の相手をしてくれていた。

父とは昔からの旧友のようで私が5才の時に祖父が旅に出る際、信頼のあるリファが村に来てくれて3年間世話をしてくれた。

だから、私にとって先生であり、父であり、兄のような存在なのだ。

そして私にはもう彼しか頼る人がいない。この世界に存在できる場所はそこしかなかった。

おそらく司教の仕事を休んで急いで私に会いにきたであろうリファの息づかいが聞こえるたびに私の闇が晴れていくのが分かった。

『マニ……遅くなってすみません…あなたの声聞こえましたよ…よく頑張りましたね』

リファは息を整えてさらに言葉を続ける

『あなたは私が引き取りますから安心してください…私があなたの居場所になりますから』

その言葉を聞いて全身の力が抜けていくのが分かった。

そして、その私をやさしく壊れないように包み込んでくれているリファの暖かさを闇に捕られぬよう強く握りしめた。

外の世界

村の見晴らしの良い高台から遠くを見るのが好きだった。いつか私もあそこに行ってみたい、あの山の中を歩いて見る景色と、ここから見える景色はどう違うのだろう。

村を出た事の無い私はずっとそんな事を思っていた。だが、叶わぬ願いだと分かっていたから、そんな事を思った後はヒドく気分が落ち込んでいた。

漆黒の髪を持ち金の瞳を有するだけで村の者は金蛇の巫女と呼ぶ。金蛇の伝説は私を村に縛り付けていた制約。

しかし、その制約も過去のものとなった。リファが司祭をしているイスクの町に向け出発したのも、昨日の話。

今私は願い続けた場所にいる。外の世界は私が思っていたより遥かに大きく。

いつも見ていた山はすぐに着くものだと思っていたらたどり着くのに半日ほどかかった。

今馬車で進んでいる道は山を越えてイスクまであと半日で着く距離にある平野で山道に比べるとかなりきれいな道だ。

『あの花はなんていう花？白の下地に薄紅色が淡くのっていてとても綺麗だ』

質問するのも今日で3度目

『ほぉ。あれはセーレンですね。綺麗な外見とは裏腹に根っこの部分には毒があってとても危険です。』
リファは右頬をさすりながら丁寧に教えてくれた。

『ふーん。覚えておくよ。それにしても青くなってきたな。』
リファの右頬をまじまじ見てニヤニヤしながら言った。

『マニのせいで殴られたんですがね。』
少し癇に障ったらしくマニを軽く小突いた。

そう、リファの右頬にできた時間が経過して青く腫れた痛々しいアザは、昨日、私を連れ出す事を村人に説明したときに出来たアザ。

自分たちでどうにかしようなど考えた事のない村人達は、今までも何か有るごとに村長の知恵を頼り、人智の及ばぬ事に関しては私に祈っていた。

村長が亡くなり頼りが私だけになった村人は、みんな反対し絶対に村から出さない、渡さないと断固拒否した。

こんな成人にもなっていない小娘に頼る村人を見てリファは私の前で初めて憤怒の形相で怒鳴ったのを今でもはっきり覚えている。

「あなた達はそんな身勝手な思いでこの子の人生を縛り続けるのですか！まだ成人にもなってない子供に頼って何になるのです。そんなあなた達が祈ったところで神は慈悲を与えてはくれません。自分達で考え、行動しなさい。今回の件は神があなた達に与えた試練なのですから。」

神に使える者の言葉で静まった村人達にさらに私が今まで思っていた事を伝えた
「私は…金蛇の巫女なんかじゃない……ただ人より珍しい姿をしているだけ…なんの力もない、ただの人なんだ……そんな私に頼らないでほしい…」

リファが私の肩に手を置いた。

「私は…普通の人になりたい」

泣きながら震えた声で言った、私は村人の顔を見るのが怖くて下を向いてしまう。

少しが間が空いたあと、聞き慣れた声が聞こえてきた
「そうでしたか……私たちはなにも知らずにマニに頼り、縛っていたのですね。今までさぞ辛かったでしょう。大丈夫。これからは好きに生きていいですよ」

コフェップの声だった。その横ではリックが泣いている。
「あなたがこの村に縛られる理由なんて何一つとしてない。村の事は気にせず思うように生きなさい。」

マニの告白と司祭のそんな言葉を聞いて村人達も今までの自分達がいかに底辺な人間だったか各々が思っているようだった。

しかし、リファが殴られたのは事が治まりそうになったこの時、犯人はさっきまで泣いていたリック。

殴られたリファの目が点になっていたのを今でも覚えている。村の

助祭と町の司祭ではどちらが偉いという疑問すら愚問なこと。
そんな、まさかの事態に村人も騒然としていてるなか殴り掛かったリックが言い放った言葉にみんな腹がよじれるほど笑った。

『いやー、あのときのリックは本当に面白かった』

荷台でごろごろしながらリファに言った。

『確かに面白い助祭でした。殴られたのに怒りが込み上げてこなかったのは私も初めての経験でしたね。』

リックのあの言葉は生涯忘れる事の出来ない思い出だ。殴り飛ばした後リックは『オレの大好きなマニを泣かせたら許さないからな！』と村人の前で赤裸々に思いを告げてしまった。

それに戸惑った私の姿を見て冷静になったらしく、顔が真っ赤になったと思ったらすぐに真っ青になりそのまま走ってその場からいなくなってしまった。

そんなことを思い出しているとリファが

『よかったんですか？』

聞いてきた。何が？と聞く事はしなかった

『別にリックとはそういう関係じゃないし。助祭と巫女の関係だから』

言ってから、ん？と思ったがすぐさまリックが笑いながら喋った

『もう巫女ではないならその関係は崩れますね。男と女の関係に』

実に楽しそうに言葉のあやをつっついてくる。

反論できなかったのでかわりに右頬を思いっきり叩いてやった。当然、激痛が走ったらしく体をくの字に折り、手綱を力強く握ってしまったので馬がびっくりして嘶いた

馬はあんまり後ろではしゃぐなと目で言っている。

『…マニ覚えてなさい。教会に着いたら喋り方から徹底指導しますからね』

『え？喋り方ってなんのことでしょうか？普段からこんなに上品に喋っていますのに。』

マニの天真爛漫さにリファは『まったく』といって小さく笑った。

『さ、後少しでイスクです。山とも当分おさらばですよ。最後に拝んでおきなさい』

そうかと思い、徐々に小さくなって行く山に手を合わせた。正確には山にではなく村がある方角に向かって。

伝説に縛られていたいっても嫌な思いでだけではなかった。楽しい事も当然あって毎年行う収穫祭や新節祭は私の大好きな行事だった。

そんなことを思い出していると涙が込み上げてきたが隣の司祭に何

を言われるかわかったものではなかったので、荷台に横になって背をむけた。

その後、私は太陽と風の気持ちよさによって眠りに落ちてしまった。眠りから覚めると石の巨人がが目の前に迫っていて起きた瞬間悲鳴を上げた。

『起きましたか。もうイスクに着きましたよ。これが市壁というものです。』

話には聞いていたがここまで高いものとは思っていなく、村の教会3つ分は有るだろう高さに感動した。

『検問を通らなければなりませんから、マニはこれを被って下さい。』

そういうとリファは荷台から修道女が着るローブを渡してくる。

『なんでこんなものを着なきゃならないんだ？お尋ね者と言うわけでもないのに』

そういうとリファは顔を額がくっつきそうな距離まで近づけて言った

『この国には金蛇の伝説はどこでも色濃く残っていますから、あなたのその瞳は絶対に見せてはいけません。あと、あなたの顔立ちは瞳が金ではなくても目立ってしまいますからね。』

前半の説明には納得がいったが後半は何を言っているのか分からな

かった。仕方なくローブを着て修道女の振りをする事にした。

『よし、止まれ。荷物を確認させてもら』

『う』とは言わなかったのはリファに気づいたからのようだ。

『どうも。いつも町の警護お疲れさまです。』

リファがそういうと男は首を横にぶんぶん振り

『とんでもありません。リファ様に比べれば私たちのしている事など…』

その言葉に司祭は笑顔で

『人の仕事に優劣なんてありませんよ。町の警護も大事な仕事です』

と言った。警備の顔は今にも泣きそうな顔になっている。

だが、ふと気づいたようだ。

『あ、あの、リファ様、つかぬ事御聞きしますが、その頬の傷はいかがなされたのですか？とても痛そうですが。まさか賊に？』

その質問に一瞬笑ってしまいそうだったがリファに足を踏まれたので我慢した。

『いえ、この傷は転んで出来ただけですのでおかまいなく。では、急いでいますので行ってもよろしいですか？』

その言葉であらぬ事を聞いてしまったと慌てて馬車を封鎖していた男達に『道を早くどけろ』と叫んだあと『失礼いたしました。』と言った。

今の一連の流れを笑いながら話そうとした瞬間、馬車が門をくぐり終わり、マニの目の前には今までみたことの無い世界が広がっていた。

見渡す限りどこを見ても人、人、人。

そして天を覆い尽くさんと建物がところ狭しと立っていて上に上に高くそびえ立っている。

そして、道の両端には商店がづらっと並んでいて果物や野菜、雑貨屋に、パン屋まですべてがそろっている。

思わず本日４度目の質問を投げかける

『今日お祭りか何かなのか？』

そういうとリファはフフッと笑ってから

『これがイスクでは普通なのですよ。祭りの時は身動きをとれないくらいになります。』

マニはその場を想像したが、そんな事になっては祭りどころではないなと思った。

『この通りがこの町で一番の大通りです。少し脇道に入れば歩きや

すくなりますよ。』

と言われて脇道に目を移したがそれでも村の広場より人が多い。

『こんなとこに住んでたら息が詰まるな』

『そのうち慣れますよ』

『だといいんだが』

話していると馬車は大きい広場に出た。

そこにはさっきの通りよりも人が混雑していて市場が広がっていた。中心には噴水があり、勢い良く水が出ている。

『ここは水の広場です。イスクはここを中心に大きくなったので一番活気のある場所ですね。ここから北が今私たちが来た方向、東が商館通り、南がイスク教会なっているので落ち着いたら散歩でもしてみたらいいですよ。』

『この人ごみじゃ、早朝か夜しか出歩きたくないな。』

そう言いながら一つ疑問に思った。今リファの説明では北、東、南方面しか言われなかったが広場からは４方向に道が延びている。

そして、妙なのがその説明されなかった通りには人通りが全くといっていいほどなく、異様な雰囲気を感じた。

なにか理由があるのだろう。

馬車は広場から南に入り進んで行くとすぐにそれは見えた。

『マニ着きましたよ。これがイスク教会です』

目を向けるまでもなく視界に入ってくる巨大な教会、そこには権威と尊厳によって立ったであろう神の住まいが町の中でもひときわ輝きながら高く聳えていた。

村の教会をを思い出し、恥ずかしくなってしまうくらい、そしてリファとの今後の関係を見直さなければならないと考えるぐらいに。

それに気づいたのかリファが、

『畏まらないで下さいね。』

と小バカにしてきた。頭にきたがここで反論しては更なる墓穴を掘るような予感がしたので自分を抑えたが。

『マニ、口が尖ってますよ。怒ってるんですか？』

『うるさい！』

結局こうなるのだ。今のやり取りで少し緊張していた気持ちが落ち着いた。もしかするとリファはこれを狙っていたのだろうか。

そんな事を思っていると教会の神々しい門が低い音をたてながら開いた。

少し姿勢を正したマニをみてリファはくっくっくと小さく笑ったのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2856i/

金の瞳曰く蛇

2010年10月28日03時02分発行